

「動き」とリゾームから見た質的研究 ～ 動的研究という観点 ～

倉 西 宏

1. はじめに

質的研究とは量的研究の対として、そして量的研究への批判的観点から発展を遂げてきた(Flick,U 2007)。この心理学的な質的研究の始まりとしては、実験心理学の確立者でもあるWundt,Wが、「民族心理学という枠の中で記述と理解を軸とする方法を用いていた」と指摘されており(Flick,U 2007)、心理学の歴史と共に質的研究は行われてきたとも言える。ただ、この質的研究の「質的」という表現は、その研究内容を適切に表現しているのだろうか。質的研究には様々な手法が存在するが、その代表例としては面接調査を行ってその語りをテキストとして分析を行うことであろう。それを「質的」という言葉で表現されているが、その表現が適切であるかどうか検討の余地はあるかもしれない。特に面接調査に限っては「動的」という観点は重要になってくる。そうなれば「質的研究」ではなく「動的研究」と表現することもできるかもしれない。「動的研究」と表現するとかなり制限された内容のようにも感じさせられるが、そのように表現することの意義も含めて本論では「動的」「動き」という観点から質的研究について論じたい。また、その前提となるようなリゾーム構造という特性の紹介も行い、質的研究やその結果生み出される研究成果の広がり等についても論じたい。

2. 研究におけるリゾーム的態度

研究とは、これまで行われてきた研究知見をもとに、新しい知見をさらに積み上げていくものであると言える。それは樹形図的なツリー(tree)構造的に進み広がっていくイメージが考えられるだろう。そしてそれは元ある形式や状態をその複製や延長として広がっていくものとも言える。もう一つとしてツリー構造の対となるリゾーム(rhizome)構造的に進み広がるイメージも存在している。リゾームとは「根茎」を意味する言葉であるが、相互に関係のない異質なものが、多様で複数の出入り口をもって結びつくような反応が生じ合う形態のことを指す。さらに言えば、見えないところで増殖していくような、様々なものに派生するような可能性を含んだものであるとも言え「生成する異質性」のモデルとも表現されている。研究においてはこのようなツリー構造的な積み上げと、リゾーム構造的な生成の両面が重要になるのだと言える。心理臨床の研究においてもそれは同様であると言えるが、ツリー構造については理解がしやすいイメージであるが、リゾーム構造的な態度や在り方は線形思考的な日常を生きる我々にとっては意識から外れやすい特徴でもある。そのため臨床心理学や深層心理学的な研究においては特にこのリゾーム構造的な研究生成イメージを意識しておくことは重要ではないだろうか。ここではこのようなDeleuze,G & Guattari,F (2010)におけるリゾームに関する

説明を紹介し、臨床心理学的研究やその質的研究に必要な態度や方向性について提示していきたい。

(1) リゾームの特徴と臨床心理学的研究

Deleuze,G & Guattari,F (2010) はリゾームについて大きく 4 つのポイントに分けて述べている。

①連結と非等質性の原理

リゾームとは、「四方八方に分岐し」「様々な形をして」「どんな 1 点も他のどんな 1 点とも接合されうる」特徴を持つものであるとしている。

②多様体の原理

リゾームとは「客体において軸の役目を果たす統一体はなく、主体において分割される統一性もない」ものであるとし、「多様体には主体もなければ客体もなく、たださまざまな規定や、大きさや次元があるだけ」だとしている。

③非意味的切断の原理

リゾームは「任意の 1 点で切れたり折れたりしてもかまわない」としており、つまり、どの部分からでも意味を成すものとして存在し、どの部分からでも別のものに育っていくものであると言える。

④地図作製法および複写術の原理

ツリー構造の論理は「すべて複写と複製の理論」であり、それに対してリゾームは「いかなるモデルにも依存しない」ものだという。何かを複写するのではなく、地図が生み出されるかのように生まれていくものだという。それは「現実とじかにつながった実験の方へ向いている」と表現されており、それはつまり実験によって確認された新しい現実が、地図を広げていくように生み出されていくような特徴を有していることを指している。「地図は開かれたものであり、そのあらゆる次元において接続可能なもの、

分解可能、裏返し可能なものであり、たえず変更を受け入れることが可能なものである」とも説明されている。

論文や一つの研究がこのような特徴を全て兼ね備えることは不可能に近いが、リゾームの特徴は臨床心理学的研究または質的研究のイメージとして有用なものであると言える。臨床心理学の中でも特に深層心理学は学際的の学問であると言え、「(1) 連結と非等質性の原理」のようにどこからでも接合可能な在り方というリゾームの特徴と合致する。そしてこれは「(3) 非意味的切断の原理」とも重なる。そして「(4) 地図作製法および複写術の原理」においては、臨床心理学がどのように世界を切り開いていこうとしているのか・生み出しているのかということイメージさせてくれる。リゾームの特徴を意識しながら研究に取り組むことは臨床心理学の研究とはどういうものか、ということ意識させてくれる。それは新たな土地を開拓して地図を広げる作業を行うというイメージであると言えよう。

このようなリゾームの特徴は臨床心理学的研究において重要であると感じさせられるが、具体的な質的研究の実際においては、どのようなことに注目して取り組む必要があるだろうか。以下では「動き」ということに注目し、研究協力者の視点と研究者の視点からそれぞれ検討を行いたい。

3. 「動き」あるものをデータとする

(1) 語りによって生じる「動き」

研究協力者にはある特定の体験が固定的に保存されていると仮定して、その固定的なものをデータとして表現してもらうためにインタビューを行うと理解している人がいるかもしれない。しかしインタビューによる「語り」を対

象とする特性上、その「語る」行為が語り手自身に影響を与えてしまうことは避けられない。「語り」の語源に「カタドル」（前田 2005）という意味があるように、語りを行うことでそれ以前に意識できていなかったものが形となって意識化されたり、語りの中で自身の気持ちに新たに気づいていくということが生じる。つまり、その人の中で潜在的であったものが、語りによって顕在化されていくのである。さらにそこから、これまでなかった自身の在りかたが展開し始めるという心理療法に類する体験のようなことさえ生じる。これらは一方的に設定された質問紙調査においては生じづらい現象である。つまり、質的研究、特にインタビューを行う研究においては、固定的なものを見出すというよりも、対象データ自体が「動き」あるものだという前提で行う必要がある。研究協力者自身が、研究者からのアプローチを受けて変化が生じ、その変化も含めて顕れてくるものをデータと認識するということである。

(2) 「動的平衡」としての人間

生きた存在にアプローチして研究を行うために必要なのは、人間にこのような「動き」が存在しているということを理解することである。福岡（2017）は「動的平衡」という言葉で生命の在り方を論じている。例えば食事によって食べ物を取り入れると、もともと肉体を構成していたものが分解されて取り入れたものの代わりに排出されていくのだという。そのような入れ替わりが絶えず生じ続け、分解と再構成が繰り返されることを通して同一態が保持されているのだという。例えば、基本的に変化が生じていないと感じられる歯や骨などのようなものでさえも実は入れ替わりを常に行っているのだという。つまり今生きている「私」というものが「私」であり続けるには、「分解と再構成」という「動

き」が必要なのだという。そしてその「動き」こそが「生命」であると述べられている。このように「分解と再構成」を常に行っているため、固定的であるとさえ感じているこの肉体も「流れ」そのものでしかないのだとも述べている。「流れ」であるものが、かろうじて一定の状態を保っているように見えているだけだという。この考えは、Gendlin,E（1990）が心について述べた内容とも重なる。Gendlin,E は、人間には固定的な心というものが存在するのではなく、刻々と体験し感じられている何らかの「流れ」が存在するだけであるとし、それを「体験過程」と命名し、それこそが生きているあかしであるとさえ述べた。肉体だけでなく心も固定的な「もの」ではなく、流れ続ける現象としての「こと」であるとするならば、生み出される語りも固定的な「もの」ではなく「こと」、つまり「動き」として捉えていくことが必要だろう。

つまり面接調査によって研究協力者の体験や語りに動きが生じ、その動きも含めた全体をデータとして認識することは、生命全体の特徴を理解した上でのことであるとも言える。ゆえに、その動きに研究者がチューニングを行いながら調査を進めていくということは質的研究においては必要なことであると思われる。これは人間の心や体験が固定的であるという認識の下では生まれない態度であると言え、単なる研究態度というよりも人間理解が問われるものであるとも言える。

質的研究の一つである修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（M-GTA）においても「動態的説明理論」を生成することが目的であるとされているように、「動き」ある概念や理論を生成することが重視されている（木下 2003）。生命が「動き」であるならば、語りの中から得られる M-GTA における「概念」についても「動

き」が重視されるのは当然とも言える。ただ、そこを単に「分類」し「名前を付けること」という感覚で取り組むと、質的研究を行う意義は失われる。質的研究の意義はこの「動き」をいかに動いたまま包み表現することができるか、というところであろう。

(3) 「動き」から理解する状態像：死別体験後の悲嘆プロセスにおける「動き」の例

この「動き」から人間の状態を理解することについて、筆者の専門の一つである死別体験から紹介したい。これまでは死別後のプロセスにおいては「段階論」や「課題論」が中心であったが、近年二重過程モデルという理解が中心的位置を占めている (Stroebe, M., Schut, H. 1999)。段階論では、階段を上がるように喪の過程が進んでいくというモデルである。これはその段階ごとの状態が固定的に存在し、そこを一つずつ順に進むというものであった (Parkes, C.M. 1986)。課題論は、誰しもが同じ段階的に進むのではないと段階論を否定し、段階とは別に「位相 (phases)」という通過していく視点も取り入れて、目の前にある課題に対して取り組み乗り越えていくと述べた (Worden, J.W. 1991)。ただ、段階論もそれを否定した課題論も、共に線形思考がその背景にある。対して二重過程モデルはこれらの段階論や課題論を否定する形で生まれたとも言える。それは喪失志向と回復志向とを行き来し、二つの様態を「動き続けるプロセス」なのである。ある時は喪失の悲しみに暮れ、だがある時には回復を目指し社会生活を営み、しかしやはり悲しみに包まれる時もある、というように行き来しながら以前とは異なる状態へと変容し続けていくのだと示したのである。この二重過程モデルの最も重要だと考えられる点は、固定化された状態にとどまるのではなく「動き続ける」中で

変容が生じていくことにある。さらに、死別後のプロセスを通して心や人間の状態は常に「動き続けている」ということが論じられ、それが受け入れられているということが極めて重要であると思われる。

では、面接調査の中で、研究協力者の体験がどのように移り変わることがありうるのか、具体的な事例を提示したい。

4. 事例を通した研究協力者の「動き」

以下に示すのは、筆者が行った遺児大学生への死別体験に関する半構造化面接である。面接では成育歴・死別体験・死別体験の位置づけとその変化についてインタビューを行ったものである。

事例：A さん

19 歳、大学 1 年、女性。家族は母、長姉、次姉、父の 5 人家族だった。

(1) 両親の離婚と父との離別体験

A さんが幼少期の頃から両親は二人で出かける時もあれば、喧嘩をすることもあり「仲悪いのか悪くないのかわからない人達」だった。小学 6 年 (12 歳) の時に、両親から離婚することを伝えられる。離婚後、A さんは大好きな次姉に「ついていく」と決め、その姉は進学等の金銭的理由から父についていくことにしたため、A さんも父についていくことにした。「絵とか服とかのセンスってけっこう父親が好きだった」と言い、父の「個性」の「影響力」の大きさを実感し「憧れ」の感情も抱いていた。ただ、父は子ども達の世話はず、趣味のバンド活動等の関心事にのみエネルギーを注ぎ、「生活がめちゃくちゃになって」いった。そのため、間もなくして次姉は母のもとに移り、A さんも中学 2 年 (14 歳) の時に母と暮らすことにし、

父と離れることになった。

(2) 父との死別体験

母のもとに行ってから「家の中は平和」だった。ただ、別居後も父との交流はあり、会うこともあった。そんな中で、高校1年の時に父が癌であることを知る。病気が悪化してからはよく父の家に行くようになるが、ほどなくして「病院に寝たきり」の状態となり、体もどんどん瘦せていった。そして間もなく緩和ケア病棟に移り、Aさんが高校2年（17歳）の時に父は亡くなった。その後、家族で葬儀にも参列した。

「元気だった父がバンて寝て、もう死ぬ、っていう。今から思えばきっと飛び過ぎてて、受け止められてなくて」「いっぱいいっぱい」だったという。また、姉達は「ちゃんと意識を持つまで父と一緒にいた」が、自分は「たぶん父親が足りてない」と感じている。父は「大して何もしてくれなかった」と共に、「何もさせてくれなかった」存在なのだと話された。

(3) 死別後の喪失体験と調査中における「動き」

死別前後の変化は「ほんとに何もなくて、寂しいとかもなく」「何も変わらなくて、何もない」状態だったという。そしてその「寂しい」が無いということが「逆にそれが寂しくて」と語った。「憧れ」の存在が「消えたみたい」とも表現し、父に関する「悩み事」も「すべて消えました」と語る。そして同時に「父が消えるともっとお父さんとかうしたいなとかも無くなるわけですから、何も考えなくなっちゃって。びっくりするくらい何もないです。変わらないし、逆になんか『はあー』って感じ」と喪失感とは異なるその空虚感を語った。

そして死別体験の捉え方が変わることは今までには無く、父の死は「何もなくて、何も気にせずきた」とも話されていた。ただインタビュー

が進んでいくと、家族を顧みない父のことは「大嫌い」だったが、それと同時に「すごい好き」でもあったということを語るようになっていく。そして幼かったAさんは父に対して何も「できなかった」という思いを抱いていたこと、「17年間ありがとうって言いたかったし、大好きとも言いたかった」が、生前に伝えられず「未だに後悔してる」という言葉も口に出されるように徐々に変化していく様子が見られ始めた。

そのような父への思いが言葉にされるようになっていくと、本調査面接の終盤には当初の「何もない」という語りとは異なる感情を感じるようになり、「今の方がちゃんと悲しい」「今の方が（中略）父はいないんだなって思います」と喪失を感じるようになったと言葉にし始めたのだった。「今、ちょうど今、『あ、意外とちゃんと捉えてた自分』って、思いました」と「今」ということを強調し、まさに「今」その感情を感じるようになったと教えてくれる。さらに続けて「今、ありありとうちは気にしてるんやなと思いました」と語り「ちゃんと父親のことを認めてるっていうか。『いた』って思ってるんやなって。『いた』のがなくなって寂しいっていうのは『今』ちゃんと思えてるんやなって安心しました」と面接中に安堵するに至った。

そして最後に、「お父さんが死んだことを、軽くは受け止めてなくてちょっと安心しました。ちゃんと今も考えれるし、思い出せるし、ちゃんとかう感情移入というか泣いたりできるし、お父さんの存在はあるなあって思いました。よかった、って。でも、またこれから先、今はもういない父親を何らかの形で思いながら生きるんだろな」と語り面接を終えられた。

Aさんは死別体験について「ほんとに何もなくて、寂しいとかもなく」「何も気にせずきた」とさえ感じていた。しかし語り始める中で、自分の中に父親が存在していることを実感すると

同時に不在性をも実感し始めるという弁証法的な「動き」が生じたのである。このように、面接調査を行うことで研究協力者の体験に動きが生じ、その自身の動きをありありと感ずることによって自分自身の体験を発見していくことがある。このようなことは質的研究の中では極めて頻出する事象である。本事例はわかりやすい変化であるとは言えるが、もう少し微細な「動き」を表現しながら面接調査が進む場合も多いであろう。

5. 研究者の「動き」

(1) 研究者を超える「動き」についていく

半構造化面接では先行研究や予備調査、自身の臨床経験を背景とした独自の仮説などをもとに質問項目を準備し、語られた内容をより深める質問を行いながら進めていく。そのような準備を行った上でインタビューを行っていても、もともと想定していたような語りではないものが語られる場合があり、その内容の中には想定していたもの以上に重要ではないかと感じさせられるものが見出されることがある。さらに、データである研究協力者の語りが固定的な止まった対象ではなくそれ自身が生きた動きあるものであるならば、関わる側である研究者においても様々な「動き」が生じることに開かれた態度で臨むことが求められる。

研究者が『想定した固定的なデータにアプローチを行う』という認識でいると、仮説とデータの 1 対 1 対応の照合を行う作業となり、研究者を超えた語りや動きがあり変化が生じつつある語りにも気づくことができない可能性がある。質的研究のデータの読み込みは、単に分類する作業ではない。それは M-GTA が発表される以前から、KJ 法に関する論考でも言及されている（川喜田，1967）。KJ 法は単なる分類手

法だと勘違いされているところがあるが、KJ 法の神髄はデータを深く読み込もうとするその態度である。その態度は「固定的データの世界」から「動きあるデータの世界」への移行を目指すこととも言える。深く読み込むと、そのデータのコンテキストも含めて立体的に読めるようになり、それはまさに「動き」を掴むことができやすくなる状態に至る。すると研究者は事前に理解していたものとは異なる視点について考えざるを得なくなり、自身の仮説や研究全体の構成自体に変更が余儀なくされていくのである。

(2) 自己変容を前提とした取り組み

研究協力者の語りが、研究者が想定していたものを超えて表現されていることを理解すると、そこから研究者は新しい視座を見出し、その視座のもとその研究を継続していくことになる。つまり、研究者は研究協力者やその語りとの対話を通して変容させられるのだとも言える。研究協力者や文字起こし後の語りデータとの間で新しい自己を発見し、これらの一連の調査を通して自己を超えていくという作業が研究者には必要なのである。そのためには研究者が自身の積み上げてきた知見や仮説のみに固執するのではなく、新しいものに開かれた態度でいることが重要になる。つまり質的研究における調査の作業は、自己変容を前提とした取り組みなのである。そしてそのような開かれた在りかたは、本論の冒頭で紹介したリゾーム的在りかたであるとも言える。

このように我々が扱おうとしている対象とは、関係性の中で生じてくる様々な事象・現象である。ゆえに臨床心理学的研究というのは研究者と研究協力者の間で生まれてくるものを研究対象とすべきであり、一方向性から観察可能なものでは一面的な結果しか見いだせない可能

性があると言える。「動的」という生命現象を理解し、リズム的とも言える自身の在り方をもって、変容していくことに開かれていることが極めて重要であると言える。

(3) 研究者の存在性（プレゼンス）の発揮が協力者の本来性を生み出す

調査研究によって研究協力者に動きが生じるということは、研究者が研究協力者に影響を与えてしまっている、ということであるとも言える。自然科学等の研究においては、それは問題であると言える。ただ、中村（1992）は「臨床の知」とは「観察者である自身を、その対象や事象との関係性を切ることなく、自身をも含めたその事象を明らかにしようとする」ことであると述べている。通常の研究であれば研究者の要因は排除されるべきものであるが、臨床心理学的研究ではそれらを排除することなく取り組むことが重要ではないだろうか。それは多義性ある人間の固有世界を、対象に身を入れた関係性をもとに明らかにするということであり、研究者の主観性からデータに影響を与えるということとは異なる。調査面接においてもある特定の方向性に恣意的に導くということは慎む必要があり、それは調査面接に限らず心理療法においても同様の態度であると思われる。

晩年の Rogers, C.R. (1986) は「プレゼンス (Presence)」という概念を重視するようになっていた。来談者中心療法における、無条件の肯定的配慮、共感的理解、自己一致（純粋性）という3つの態度はセラピストの中での重要な「動き」であるが、プレゼンスはそれに加えて第4のものとして検討されることもある態度である。池見（2005）は「プレゼンス」とは「クライアントに感じられてくるべきものが感じられてくるような治療者の存在のあり方」と述べている。つまり、そのような在りかたをセラピストが保つことで、感じられてくるべきものが

クライアントに自ずと感じられてくるのだという。このような心理療法におけるセラピストのあり方と同様の態度で調査面接に臨むことができれば、自ずと研究協力者の語りも恣意性の無い深まりと展開を示すことになるのではないだろうか。これは潜在的であったものが顕在化されることになるということであり、それはつまりもともと持っているものを引き出しただけであるため、研究者が恣意性を持って協力者を歪めているということとは大きく異なる。「プレゼンス (Presence)」はセラピストの「存在性」のことであるが、その具体的在りかたは簡単なものではない。ただ、質的研究においては研究者の要因を「ゼロ」にしようとするのではなく、研究者が自らの「他者との出会いのかた」の態度を練り上げていくことによって、逆説的に研究協力者の語りが十全に発揮され、自身の内包している体験を表現し切ることが可能になる場合がある。このような「恣意性を持った歪め」ではなく、「潜在的なものが顕在化されていくような調査者の在りかた」を目指していくことが臨床心理学的研究においては重要ではないだろうか。

6. 研究者と研究協力者の間で生まれる相互影響関係性とそれを支えるもの

「研究者」と「研究協力者」がそれぞれ「動き」を生じさせながら調査が進められることを述べてきたが、それらが関係性を保ちながら研究を行うということは、それぞれの「動き」が相手の「動き」に影響を与えるという相互交流の上でデータが生み出されるということだと言える。それは、①協力者が内包している体験を表現し切れるようなプレゼンスを研究者が発揮する、②面接調査を通して研究協力者の中で「動き」が生じ新しい語りが生み出される／研究者

の想定を超える語りが生み出される、③研究者が想定していなかった語りを受け取ることによって、研究者の中に新しい着眼点が生み出され、その新しい視座を加えてインタビューを行う、④「③」の内容に影響を受けて「②」の動きが再び生じる、という相互的な影響の与え合いが大きく又は微小に継続して生じているということが言える。「②」や「③」のような事象は予備調査の段階で終わらせておくべきものであるという指摘もあるだろう。ただ、いくら予備調査を行ったとしても、さらに新しいものが見出されるということが生じ、さらに調査データを深く読み込んでデータと対話を行っている、やはり新しい発見が見出されるものなのである。これができていない場合は、調査面接や語りの読み込み不足があったのではと疑いさえも生じるように筆者は感じさせられる。

このような研究者と研究協力者の間で生まれるそれぞれの「動き」を含んだ相互影響関係に「勇気をもって」飛び込むことが必要となる。我々は固定的で形ある世界で生きていると錯覚しすぎ、そうではない世界に飛び込むと『もう一度それらを論文という形に留めることが可能になるのか?』と恐れてしまう。動きある「向こう側」に飛び込み、それを得て論文を形にするという「こちら側」にきちんと帰ってくるという作業が行われて初めてそれが他者に役立つものとなる。そのようなプロセスで重要なのが、大学院で言うならば指導教員の役割だろう。中井・山口（2001）は臨床におけるスーパーバイザーとバイジーの関係を説明する際に、バイジーは潜水している者として、バイザーは水上で潜水しているバイジーへ酸素を供給し、緊急時には引き上げてくれる役割として表現している。これは研究においても同様のものではないだろうか。そう考えると大学院修了後の研究におけるスーパーバイザーという存在も、もっと

活用や広がりが見出されてもいいのではないだろうか。

7. 質的研究における視覚化と「余分なもの」

このような流動性のある語りや体験等のデータを扱うため、その結果をどう整理するのかは慎重に行う必要がある。例えば M-GTA や複雑経路・等至性モデル（TEM）は最終的に視覚化して結果を提示する。そしてそこには M-GTA ならばプロセスとしての「動き」が、TEM ならば非可逆的時間に沿って流れる「動き」が表現されるように提示する必要があるが、このような視覚化には単純化させてしまうリスクが存在している。つまり視覚化の際に、その動きが止まってしまうような表現になる場合や、視覚化のわかりやすさを出すために余分であると思われるものを削ぎ落とす作業が行われる場合がある。しかし、わかりやすくまとめたものとして表現するために削ぎ落とした「余分なもの」には、新たな何かを生み出す要素が含まれている場合がある。

内田（2006）はユダヤ文化に根差した研究者の中にノーベル賞の受賞者といった特異な人物が輩出される割合が突出して多いことから、ユダヤ文化に特有の何かがあるのかどうか検討を行った。その中では、「ユダヤ人」という人種は存在しないと言及した上で、ユダヤ文化には簡単に結論を付けない、という特徴があることを見出した。それはものごとを簡単な、一義的な解釈で片づけてしまうことを厳しく自制し、シンプルな「解」に落ち着いて終わらせることを避けるのだという。つまり固定的な解に着地させずに、答えが出ない形で留めておくという文化があるのだという。そして、そのような態度を持つことによって育まれる知性があると述べられている。このような態度は、語りを読み

込むことや、その結果をどのようにまとめるか、という点において示唆に富むものであると言える。明確に掴むことができる部分と、意味がつかみ取れないが、何か次につながる可能性のあると感じ取れるものは存在する。つまり研究はそれ一つが完成品ではなく、形になりきらなかった「余地」をどれだけ示すことができるか、ということも重要であり、それはリゾーム的構造であるとも言えるだろう。

8. 研究成果が伝達するもの

最後に研究によって伝わるものについても言及しておきたい。研究で得られた知見は研究者の手を離れて知見として積み重なり、その結果、現代の科学の知は生まれてきたと言えるだろう。研究や論文はひとつの情報伝達であり、そこでも送り手と受け取り手が存在する。ただ、臨床心理学における研究においては、知見や視座を生み出す研究者（臨床家）の存在と、それを受け取る研究者（臨床家）という関係性が無意識的に重視されているように思われる。科学とはその観察者と研究者との関係性を切り離すことで成果を生んできたが、本論で述べたように臨床心理学では研究者とその対象者が切り離されずに生じた結果をもとに、新しい知見や視座を生み出していくものである。そのような研究協力者との関係性を保ったまま研究を行い、最終的な成果として表現される論文にはその著者の存在が色濃く残り、研究の成果として表れているデータや結果を超えて、読み手との人格的交流さえも行われているのではないだろうか。そう考えるならば、研究に「私性」が乗る（意図的にではなく、結果として）ということとは重要な視点であるように思われる。

中沢（2003）は「贈与」について「人と人との間に感情的・人格的なつながりをつくりだす

力」と述べ、その特徴を以下の3つにまとめている。特徴①：贈り物はモノではない。モノを媒介にして、人と人との間を人格的な何かが移動している。特徴②：相互信頼の気持ちを表現するかのように、お返しは適当な間隔をおいておこなわなければならない。特徴③：モノを媒介にして、不確定で決定不能な価値が動いている。この3点を挙げた上で、「モノの移動を媒介にして同じ方向に移動していく、流動的で連続性を持っているなにかの力の動き」が存在していることを指摘している。論文を通してこのような目に見えないものが移動する「動き」が、影響を与え合うということが生じてはいないだろうか。

9. おわりに

本論ではリゾーム構造や動的平衡等の観点から人間を理解し、さらにその人間理解と重なるような研究が生じさせられることが重要であるということを述べた。そして研究協力者と研究者との「動き」が影響を与え合いながら、その「動き」が重なり合うことで語りが生み出されていくのである。言うは簡単だが、それを実際に結実させていくことは極めて難しく、筆者自身もそれが十分できているとは言い難い側面もある。本論で述べたような研究協力者・研究者（臨床家）・論文の読み手（臨床家）の3者がそれぞれの中に「動き」を生じさせ、3者が相互影響を与えることで大きな「渦」を生み出し、それが臨床心理学という研究分野全体の「渦」へと広がっていけるように取り組んでいければと思う。

文献

Deleuze, G., Guattari, F. (2010). *Mill Plateaux Capitalism et schizophrénie* 宇野邦一・小沢

- 秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明
 翻訳 (2010) 千のプラトール 上 資本主義と分
 裂症 河出書房新社
- Flick,U (2007). An introduction to qualitative
 research 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚
 子 翻訳 (2011) . 質的研究入門―“人間の科学”
 のための方法論 春秋社
- 福岡伸一 (2017). 新版 動的平衡 小学館新書
- 池見陽 (2005). フォーカシングとクライアント中心
 療法 伊藤義美編 フォーカシングの展開 ナカニ
 シヤ出版 3-18
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプロ
 ーチの実践 質的研究への誘い 弘文堂
- 川喜田二郎 (1967). 発想法―創造性開発のために
 中央公論社
- 前田富祺 (2005). 日本語源大辞典 小学館 331
- 中村雄二郎 (1992). 臨床の知とは何か 岩波書店
- 中井久夫・山口直彦 (2001). 看護のための精神医学
 医学書院
- 中沢新一 (2003). 愛と経済のロゴス カイエ・ソバー
 ジュ (3) 講談社
- Parkes,C.M. (1986).Bereavement. Tavistock 桑原治
 雄訳 (1993) : 死別 メディカ出版
- Rogers,C.R (1986).A Client-centered/Person-
 centered Approach to Therapy. Kutash,
 I.,Wojf,A. (Eds) Psychotherapist's Casebook.
 Jossey-Bass 197-208 ロジャース選集 (上) 誠
 信書房 162-185
- Stroebe,M.,Schut,H. (1999).The dual process model
 of coping with bereavement: Rationale and
 description. Death Studies, 23 (3), 197-224
- 内田樹 (2006). 私家版・ユダヤ文化論 文藝春秋
- Worden,J.W. (1991).Grief Counseling and Grief
 Therapy:A Handbook for the Mental Health
 Practitioner. New York: Springer Publishing
 Company. 鳴澤實監訳 大学専任カウンセラー
 会訳 (1993). グリーフカウンセリング 川島書店

Abstract

Qualitative Study from the Perspective of Rhizome and “Movement”: Perspective of Dynamic Research

Hiroshi KURANISHI

This paper discussed the importance of understanding humans from the perspective of rhizome structure and dynamic equilibrium, and that research should be conducted from a "dynamic" perspective based on this understanding of humans. When conducting an interview survey, research subjects experience "movement" within themselves. This presentation showed that such non-fixed, moving things can be used as research data, introducing actual survey cases. Furthermore, the researcher who deals with the subject in motion is also transformed by the survey data. In this process, the researcher will find a new perspective, which is called "movement. The researcher then needs to conduct research on the relationship between the research subject and the researcher in such a movement. Finally, it was mentioned what research papers could give the reader. The "movement" created by the research subject, researcher (psychological clinician), and reader (researcher / psychological clinician) spreads as a "vortex", creating research on clinical psychology.

Key words : qualitative research, rhizome, dynamic research

